

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.12

最近、ご助がお屋敷へ頻繁に行くようになりましたな。

随分とお勤めに身が入るようになったもんじゃ、と拙者は喜んでおった。

じゃが、ご助は奥方様が買い物に行かれたり、姫様が幼稚園からお帰りにならない時間帯ばかりを見計らうようにして、お屋敷に向かう姿に少々違和感を覚えてな。

疑ってはイカンとも思ったのじゃが、^{しょうね}性根（意：心構え）を知っておるだけにその日、ご助の後を付けたのでござるよ。

ご助は拙者たちがお屋敷に入りますときに使用する、ミー殿の出入り口から玄関へと入ると、マニュアルの順路である賄いどころへ・・・と進まず、真っ先にマニュアルでは最後の警戒場所である^{ゆどの}湯殿（意：浴室）へと向かいましたのじゃ。



「おかしな順路じゃの？」と^{つばや}呟きながら、ご助に遅れて湯殿へと入った拙者を
ゴオオオツ・・・という轟音とともに体を吹き飛ばすような強風が襲ったの
でござる。

「な、なにごとじゃ！！」と叫ぶ拙者の声は轟音にかき消され、代わりに風上
から

「きゃほーっ」という歓声とともにご助が飛んで来ましてな。その後、ご助と
ともにおよそ^{にけん}二間（意：約3.6m）ばかりも吹き飛ばされたのでござるよ。



「お、おのれは、な、何をしたのじゃあっ？」とご助の尻の下から拙者が叫べば、

「あっ、だ、旦那様・・・何でここに？あっ、旦那様も屋内ダイビングファンですかい？」とご助の答えに、

「・・・屋内・・・ダイビングう・・・？なんじゃそれは？とにかく汚い尻を除けろ！」と叱ったのでござる。

ご助の話によりますれば、10日ほど前のこと、湯浴み（意：入浴）を終えた姫

様が、奥方様にドライヤーで髪を乾かしてもらっておったのじゃが、ご助を見
つけると

「ぼすけ、まっちえおれ。おきゅないたいぴんぐであそびよ。」とおっしゃた
のじゃと。

髪を乾かしおえた姫様は、控えておったご助をつまみ上げると、ドライヤー
のノズルを上に向け、スイッチをいれたのじゃそうじゃ。

「驚いたの何のって旦那様。私の体
が天井近くまで飛び上がりやして
ね、フワフワと空中を遊泳するよう
な感じでさあ。奥方様がマグロとか
サーモンとか言って姫様に注意し
てらっしゃいましたが、姫様が『強
じゃ！弱じゃ！』と仰るたび、急浮
上や急降下を繰り返しましてね。」



「うむむ、羨ましいの。」と拙者が漏らすと

「でしょ？急浮上に急降下ですぜ。」とご助は繰り返したのじゃ。

急浮上に急降下とご助が繰り返しに、過ぎる夏姫様の手になる『G15』に
搭乗したときの高揚感を思い出したのじゃ。（※VOL.4 参照）

「で、今は何をしておったのじゃ。」と聞くと

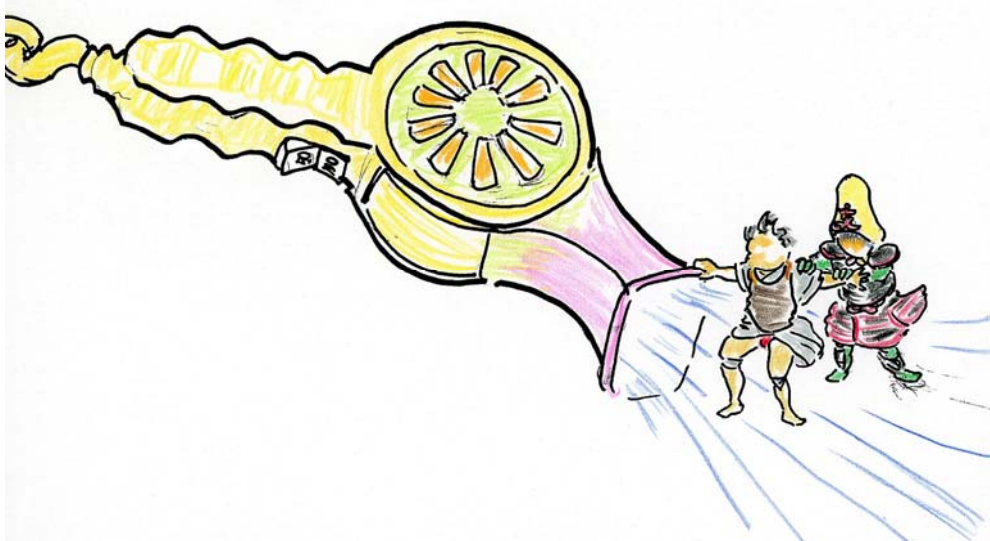
「平置き空中遊泳でさ。」とご助。

「ひらおき・・・？・・・何じゃそれは？」と更に聞くと

「あちらですよ。」 と

ご助が指さす方をみれば、洗面台の床に転がったドライヤーが轟音をたてな
がら、そのノズルから熱風を吹き出しておったのじゃ。

「旦那様、こっちからですぜ。」とご助が手招きに誘われ、拙者は壁伝いにド
ライヤーのノズル横へと到達したのじゃ。



「み、見てて下せえ旦那様・・・。これは病みつきになりやすぜ。」とご助は言う、ノズルの前に一歩踏み出したのでござる。と、途端にご助の両脚が床を離れ、ノズルの縁を掴んだご助が宙に浮いたのじゃ。

「きゃほーっ・・・旦那様あ・・・飛びます、飛びます。」そう言い残し、両手を離したご助の体は、人間大砲のように遙か四間（約7.2m）先の茶の間まで滑空していったのじゃった。

「馬鹿なことを・・・。」と、いつもなら目覚める筈の理性が、姫様との日常で壊れかけておった拙者は、勿論、ご助の後を追っておって・・・。

「きゃあっほおーっ」と時間を忘れて何本目かの滑空を楽しんでいた拙者は、茶の間のテレビ台に置かれた堀川の木目込み人形が手にもった傘に気がついたのでのじゃ。

主家の大切な人形じゃということは分かっておったが、ここでも空中遊泳への思いが拙者の理性を上回り・・・人形様のお手から傘を拝借してしまったのじゃった。



そして脱衣場に戻った拙者のご助と二人、ドライヤーのノズルを上に向けると、傘を持ち「いざ」という掛け声とともに天空へと飛び出したのじゃ。

おおおおっ・・・なんと！！

拙者のご助の体はあっという間に天井近くまで吹き上げられたのじゃ。

そして拙者は……。手に持った傘から手を離すとドライヤーの風に乗る空中遊泳を。

「だ、旦那様……。それですじゃ。その浮揚感ですじゃ。」というご助に

「おおっ、凄いのご助。こんな所まで吹き上がるとは、わははは、アツパレじゃあ。」と。



拙者が感嘆の雄たけびを上げた刹那せつな（意：瞬間）、

『カチッ』という音だけを残し、ドライヤーが止まったのじゃ。

「!!!???な、なんちゃ・・・た、助けろご助えー！」

・・・しかし・・・鋼鉄の鎧を身に着けた拙者の体は、加速度を増して落下し、あっという間もなく、仰向けに脱衣場の床に叩きつけられておったのじゃ。

天空を見上げる拙者の目には傘を落下傘のようにして優雅に下りてくるご助の姿が・・・。

遠目にも、落下の衝撃で薄れゆく意識の中であっても、ご助が必死に笑いをこらえているのが、はっきりと見て取れたのでござる。



「ひい、ひいいいっ、だ、旦那さま……。だ、大丈夫ですかい……。ひいいい
い……。く、苦しい……。」

というご助の声に気づき、

「な、何が……。く、苦しいの……。ちゃ……」と全身の痛みと怒りをおさ
え問いただせば、

「だ、旦那様……。お気づきですかい？」と涙を流すご助に拙者の怒りは消え、
「し、心配をかけたの。じゃがもう大丈夫じゃ。」とねぎらいの言葉を掛けた
のじゃが、

「ひいいい……。っ、あまり笑わせないでくださいませまし。こう毎度じゃあっしの
腹が持ちませんや。」とご助が話すに至り、拙者の怒りはMAXに

「き、貴さまという奴は……」とその時、

ゴオオオオ……。とドライヤーが眠りから目を覚ましたのでござる。

「な、なにごとか!？」と驚く拙者に

「さっきお話ししたではありませんか。奥方様が姫様にマグロだかサーモンだかって。」

「・・・だから、何じゃそれは？」

「聞いてなかったんですかい。長いこと使い続けるとドライヤーの中にマグロだかサーモンがやってきて止まってしまうから長いこと遊んじゃ駄目よと姫様に。」

「ドライヤーの中にマグロだかサーモン???・・・あっ、サーモスタット（温度調整装置）じゃないのか！サーモスタットが働くと止まってしまうからな。」

「な、何がいけないんですかい？」というご助に、



「サーモスタットで止まっておっても通電しておるから、放っておけば今のよ
うに勝手に熱風がでたり故障したりするんじゃ。ドライヤーの中には電熱コイ
ルがあるから火災の危険も高い。使い終わったら必ずコンセントからプラグを
抜く！これを習慣づけねばの。」と続けると

「も、物知りですな、旦那様は。」

「そ、それはそうと、おのれは拙者が傘から手を離す前になぜサーモスタット
の話させなんだのじゃ？それにおのれはなぜ傘を手放さなかったのじゃ？」と、
問い詰めれば、

「へへへっ、物知りな旦那様だから何時か止まることくらい知っておいでじゃ
ろうと・・・それに・・・ぷっ」

「それに？それになんじゃ？」

「それにしても、いやぁ見事なスカイダイビングでしたじゃ。ガシャーンと・・・。

さすが
流石、先祖伝来、丈夫な鎧兜ですじゃ。危ない危ない、もう少しで私の腹の方
が壊れるところでしたぜ。」



ご助のあまりの言動に、拙者は怒りに任せ我を忘れて等身の術を使うところじ

やった・・・。危ない危ない。(つづく)